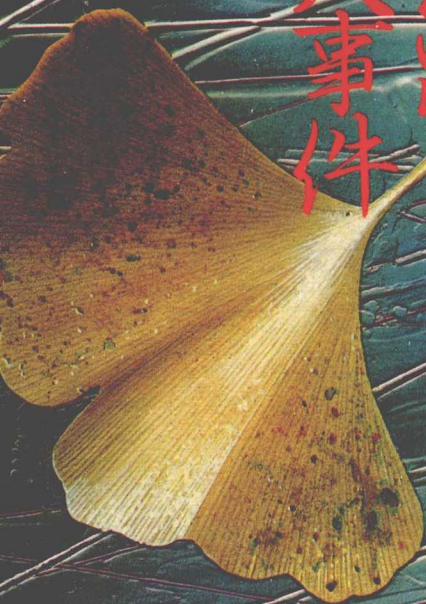


斎藤栄

信濃路

殺人事件



徳間文庫



しなの　じさつじん　じけん
信濃路殺人事件

© 1983 Sakae Saitô Printed in Japan

102-20

1983年3月15日 初刷

著者　斎藤栄さいとう さかえ

発行者　徳間康快とくま やす かつ

発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四一〇丁一〇五

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

印刷　凸版印刷株式会社

編集担当　芦沢孝作

ISBN4 19-567434-4 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳 間 文 庫

信濃路殺人事件

目次

第一部 秋の謎

第一章 彫刻破壊

第二章 ホテル経営

第三章 天井の怪

第四章 巨匠

第五章 病める女

第六章 最初の事件

第二部 冬の怪

第一章 雪の高原

第二章 奇妙な死体

第三章 弥生と母

第四章 深まる疑問

第五章 知能犯

第六章 迷宮入り

186 170 156 138 122 105 87 71 58 39 23 7

第三部 春の脅迫文

第一章 死を呼ぶ影

第二章 秘密の日記

第三章 詐欺事件

第四章 第二の悲劇

第五章 モナリザ

第六章 一転二転

第四部 夏のトリック

第一章 寝台列車

第二章 恐怖誘拐

第三章 闇の中で

第四章 殺人犯

第五章 愛する人の名

第六章 生命の讃歌

解説 影山荘一

399 384 369 353 338 321 305 287 271 258 238 222 205

第一部

秋の謎

第一章 彫刻破壊

1

銀杏の葉が一面に散りしいている上野の森。美術の秋ともなれば、美術愛好家ならずとも大勢の家族連れで賑わう場所である。

しかし、その喧騒も、午後九時を過ぎると、いくつかの若いカップルの逍遙をみるばかりで、人影はマバラになってしまう。

国立彫刻美術館は、新しく鉄筋三階の白亜づくりで、今春、建設されたものだが、この美術館の実現には、当代彫刻界の第一人者、志賀一清の政治的な働きがあるという、もっぱらの噂であった。深夜になると、この彫刻の殿堂もすっかり寝鎮まってしまう、落葉を鳴らして現われる数頭の野犬ばかりが蠢く世界に変わる。

ひとつの黒い影が、雨樋を伝わって、二階、三階へと登ってゆく。丁度、上野の山から見える銀水堂時計店の看板大時計が、午前一時を指したときだった。

三階から更に屋上へのぼった影は、そこからロープを伝わって、逆に三階の網入りガラスまで懸垂してきた。そこで、ガラス切りの道具でガラスを四角く切りぬき、次に先の細いペンチで金網を

切断した。そして、手を内部に入れて、窓の掛け金ラッチを開いた。

間もなく、影はするつと三階展示場の内部におり立った。

現在、この館では、志賀一清の最新作を中心にした特別展覧会が開催され、三階はすべて、巨匠志賀の作品で埋まっていた。

影は、足音を忍ばせて、闇の中に林立する彫像のそばに歩み寄った。

志賀の作品は、すでに六十歳を越した男の創作とは思えぬくらい、常に瑞々みずみずしかった。テーマにしても、〈恋する若者達〉〈飛翔〉〈四人の輪〉など、愛と性を描かせては、当代、この人の右に出る彫刻家はいないとさえ言われた。

今回の展覧会の目玉は、大作〈四人の輪〉であった。

これは、男女各二名の青年と老人が、全裸で輪をつくり、それぞれ何かを求めるポーズでできている。

しかも、志賀はこれをテラコッタで仕上げたのである。そのために、特製の窯かまを京都の郊外につくって焼いたのだという。

素材とテーマのユニークさが、展覧会の初日から話題となっていた。

影は、なんの躊躇ためらいもなく、この〈四人の輪〉の前に立った。そして、手にしているものを振りあげた。それは夜目にもそれと分かる大型ハンマーであった。

ハンマーは大きくスイングすると、夜の静寂を破って、ガシャンと、テラコッタに当たった。

たちまち、中央の女性の頭が碎け、頸くびのつけ根から裂けて下に落ちた。思ったより大きく透る音がした。影はハツとしたように、一瞬、手を休めて耳を澄ませた。

しかし、階下では動く人の気配がなかった。一階には、宿直員二名がいる。一名ずつ交替で、二

時間おきに館内を巡回するルールなのを、影は知っていた。

〈四人の輪〉を不細工な疵物^{きずもの}にしてしまった後、続いて〈飛翔〉〈恋する若者達〉の順に、志賀一清の大作は、致命的な打撃が与えられていった。

さすがに、この騒音は、一階まで届いたとみえ、階段を二段ずつ、駆けあがってくるような足音が聞こえた。

すると、影はさっと窓際に駆け寄り、ロープの一端を窓枠に固定すると、それを伝わって、素早く地上におり立っていた。手には皮の手袋をはめていたのである。

宿直員は、大型の懐中電灯を、無残にも破壊された彫刻群像に向け、あまりのひどさに「あっ」と息を呑んだ。そして、次の瞬間には、開放されたままの窓際に走り寄った。一本の丈夫なロープが、長々と闇の中へ沈んでいた。

明らかに犯人は、このロープを伝わって逃走したのだ。

事実、このときの宿直員、近藤健太郎は、背を丸めて、隣接の博物館の陰に消え去ろうとする犯人の黒い影を、一瞬、認めていたのである。が、むろん、それだけでは、何者の仕業とも見当がつかない。

近藤は、電灯のスイッチを点けた。パッと真昼のような明かるさが現出した中で、首を失った彫刻の、異様な光景がまざまざと目を射た。

〈これはひどい！〉

思わず呟いた。

盗まれた様子はなく、犯人の狙いは、すべて破壊することにあっただらしい。

「おい、大変だ……」

近藤が、息を弾ませて、仮眠中の同僚を起こしたのは、それから間もなくだった。

2

その日は日曜日だった。

牧雅彦と智子は、銀座にある「オリオン美術館」の現代美術展会場にいた。二人は、来年二月には、結婚することが決っていた。それまでの甘い婚約時代を、映画や喫茶店で過ごすかわりに、こうして、絵や彫刻の展覧会場を巡ることで代えていたのである。

警察庁の特別捜査員としての牧警部は、美術関係を担当しているのだし、このプランは一石二鳥といえた。

一方、海老原智子も、パリで勉強してきた知識を一層深められるし、何よりも、恋の時期には、美術の世界がよく似合った。

オリオン美術館の談話室は、グリーンのカーパーペットに、ペルシャ織りの壁掛があつて、コーヒーも注文できるから、下手な喫茶店より、よほどムードはよかった。

「……ペルシャ絨毯のよきは、なんといいってもこの絹を使ったものですよ。光沢が、視点によって、びっくりするほど変る。そこに魅力がありますね」

牧は、ダブルのスーツを着、どこからみても警察畑の人間ではなく、大学教授みたいな恰好をしていた。

「でも、こうやってみると、全体にアンバランスでしょう。手織りのためでしょうけど、なんだか、できそこないみたいだわ」

智子はペルシャ絨毯には、まるきり知識がなかった。

「いや、そのアンバランスがいんです。自然なんです。よく考えると、この世の中には、直線とか、完全な円など、どこにもありません。そうでしょう。それは、幸福とか不幸とかいう観念と同じなんです。美術の世界ばかりじゃなくて、われわれはもう少し、不完全とか不足とか、不均一とか、そういう観念を見直す必要がありますはいしなかな」と、牧は微笑しながら言った。

「でも、嫌。私達の幸福は、完全なものでありたいわ」

智子は即座にそう言い返した。彼女の右手の薬指で、ダイヤモンドのエンゲージリングが輝いた。「完全でありたいと希うのは当然ですよ。ぼくもそうです。ただ、希うことと、現実とは別だと思わなけりやね」

「ええ、でも……」

智子は、また「でも」を繰返した。たとえこの世の中に、完全がなくても、二人の愛だけは、そうでありたいと智子は強く思っていた。

「ハハハ……。まるで、駄々っ子みたいだね。だけど、そこが好きなんだ。とにかく、ペルシャ織りは、貧しい人の細かな手織りの品だから、なんだか、そこから生活が滲んでくる感じがする」

「ねえ。私達の新婚旅行、外国には行けないんでしょう？」

「多分……二月頃はダメだろうね。夏になったらチャンスがあるかどうか」

「だったら仕方ないわ。国内でもいいのよ。どこへ行きましょうか？」

「それはまかせたんじゃなかったかな。ぼくは花嫁さん次第だと思っている。なんと言っても、結婚式の前とは、新婦が大変な疲労をするからね」

「私にばかり押しつけて……ずるいわ」

「別にずるくはないと思うね。まあ、ぼくの意見を言うならば、京都へなん日か行っていたいな」

「それもいいわね。京都はまだ充分に見えていないし……」

「美味しい日本の伝統料理も、沢山あるからね。二月といえば、やはり中心は、観光より食事だろう？」

「そうね」

智子が頷いたとき、突然、牧の胸のところで、鋭くポケットベルの鳴るのが聞こえた。

「あ。呼ばれた」

と、牧は反射的に、肘掛椅子から腰をあげた。

「お仕事？」

智子が心配げに訊いた。

「多分……。そうでないことを祈るけど、日曜日に、わざわざ呼び出してくるのは、うちの怖い上役だろうね」

牧は、言葉とは反対に、いかにも楽しそうな言い方をした。

「事件かしら？」

「十中八、九……」

そんなやりとりの末、牧は、館の出入口近くにある公衆電話のところへ、急ぎ足で立っていった。

電話の内容は、要領よく牧に伝わったらしい。間もなく、智子の待つ談話室に戻って来た牧は、すまなそうに言った。

「お察しの通り、厄介な事件だよ。上野の森で、重要な彫刻をこわした者がいるんだ。すぐに行つてやらないと」

3

彫刻は、絵画とならんで、古代から二大美術とされている。その違いは、絵画の二元性に対して、彫刻の三元性——いわゆる立体性にある。

牧は、絵画ばかりではなく、ギリシャ彫刻の研究もしていたし、現代日本の彫刻家とも親しく接する機会を持っていた。

そこで、昨夜、上野の国立彫刻美術館に怪人物が侵入し、三階に展示されていた彫刻界の巨匠、志賀一清の有名な大作を三つも破壊したと聞き、耳を疑ったくらいである。

美術品の被害といえば、十中八、九は、有名絵画の盗難である。彫刻は重量感があるので、ほとんど盗みの対象にはならない。

いわんや、持ち出すのではなく、それを破壊するだけというのは、一体、どういう趣旨だろうか。オリオン美術館の前から、タクシーに乗り込み、上野へ向かう間、牧の念頭にあったのは、この疑問である。

展示された彫刻を、入場者が棒で叩いたり、スプレーをかけるといふ悪戯は、これまでにないなかつた。いずれも、変質者の発作的な行動で、それほど計画的とは思えない。が、今回の犯人は、人気のない時刻に、わざわざ、館内に侵入しての行為である。

これに類する犯罪は、外国の有名な探偵小説にある。石膏細工のナポレオンの像を、ひとつひと

つ見つけては壊してゆく犯人。この動機は、その像の中に、宝石がはいっていたので、発見するまで壊して歩かざるをえなかった。

しかし、この例も、志賀一清の代表作を破壊した今度の場合には、どうもピッタリしない。

「あの巨匠に、何か怨みを持っている者の仕業だろう」

と、牧は推理した。

牧は、これまで二度、この彫刻界の巨匠に会っている。

一度は、志賀の著書「彫刻における視覚」という本を借用に行ったとき。志賀は、芸術家タイプというより、政治家的で、そのせいか、役人にはサービスがいいという。そのときも、牧には親切にしてくれた。

二度目は、警視庁内に、美術品犯罪研究委員会という組織をつくったときに、その顧問に就任を頼んだ際である。

愛想のいい老人という感じであった。

国立彫刻美術館へ行くと、所轄署の蒲谷警部が、牧を出迎えた。

「とにかく、現場を見てください。犯人は、志賀先生に怨みを持つ者でしょう。ただ、壊して逃げているんです」

蒲谷は、やや突き出し加減の瞳を、ギョロギョロさせて言った。

「遺留品は？」

牧は気になっていたことを訊いた。

「ロープが二本だけです。指紋などは、一切残っていません」
それだけでも、計画的な犯罪だと分かる。

「じゃ、現場を見ようか」

三階のその部屋は、展覧会の目玉であったが、今日は「閉鎖」の札をさげて、関係者以外の立入りを禁止していた。

牧は、話にきいていたが、巨大な志賀のテラコッタを見て、その大きさと迫力と艶のある作品に思わず息をとめた。

特に、〈四人の輪〉は、堂々たる人間の裸像で、その筋肉と皮膚の美しさは、こうした材質で、よく、これだけのものを創造したと、舌をまくほどだった。

だが、それだけに、若者男女二人の首が、鉄の一撃を受けて、ポカッとなくなっているのは、不気味としか言いようがなかった。

損害を受けているのは、このほかに、〈恋する若者達〉と〈飛翔〉の二点だった。いずれも、中心になる人物は、男女を問わずその顔が叩きこわされていた。

「これはひどい。作者というより、この彫刻のモデルに怨みでもあるみたいだ」

と、牧は一瞬、呟いてしまってから、自分の言葉の持つ意味の重大さに気がついた。

「外国の犯罪例に、こうしたケースはあるのですか？」

蒲谷警部は、この方面の専門家である牧に敬意を表して訊いた。

「マニヤックな人間の惹き起こした事件には、美術品破壊というのもあるようですね。しかし、今回のはちょっとトーンが違う感じがする。何か裏が……。事件は、志賀先生にお知らせしましたか？」

「はい。館長室の方に、お弟子さんの笹本三四二さんと二人で来ていられます。お会いになりますか？」